美博だより

VOL. 72

飯田市美術博物館ニュース―― 2006. 1. 5

発行●飯田市美術博物館　〒395-0034　長野県飯田市追手町2-655　☎0265-22-8118　印刷●龍共印刷株式会社

仲村進　「遠山郷」　昭和60年　本館蔵

足もとを見る

館長　井上　正

何ごとについても、当り前のように思ってしまっている事柄の根本をあらためて疑ってみることは大変有益である。近年、年を加えるごとにその思いを深くする。

美術史学は作品の創り出した美の様式を探り、人間の美意識の変遷について考える学問である。一本調子にこの道を進めば、「一時代一様式」論に行き着く。小異はあっても大同のこととして一様式を指摘することで論は明快となる。

しかし、仏教美術のすべてを美術史の一部として型に閉じ込め、「一時代一様式」の原則に従わせたことは大きな誤りであった。仏教美術には型に嵌めることとは対極的な「感得」による自由な仏の姿があったことを忘れていたのである。

この誤った方法によってつくられた古代日本美術史は、大きく歪んでしまった。大小を交えて、訂正すべき問題は実に多い。

自分自身の立脚点をあらためて見直す心構えで、それぞれの専門の分野を振り返る旅に出ることをおすすめしたい。

寄贈記念特別展

仲村進展

―大地と語り、牛に歌う―

1月14日(土)～2月19日(日)

仲村進は、昭和四年（一九二九）、下伊那郡松尾村（現飯田市松尾）に生まれた日本画家です。満十四歳の時、満蒙開拓義勇軍に志願して北満に渡り、外地で敗戦を経験して辛苦を乗り越え帰国しました。

帰郷後、郷里の南画家片桐白登に絵画を習い、県展・新制作協会展に出品、その後、高山辰雄門下に入り、日展に活動の場を移しました。

日展では、二回の特選、文部大臣賞を受賞し、審査員も務めて評議員となりました。また、山種美術館大賞を受賞し、現代日本画の期待作家として注目を浴びました。

▶黄砂の大地　昭和五十八年 個人蔵

平成十六年（二〇〇四）二月、制作への情熱が冷める間もないまま、仲村進はこの世を去りました。同年十二月、ご遺族より作品三十五点の寄贈をいただき、本展が実現することになりました。これに当館での購入作品、山種美術館賞展大賞受賞作品などを加え、仲村進の生涯を追います。

今回の展覧会は、三つの部屋で構成します。最初の部屋の展示は故里山河です。ここでは、平成六年に開催された個展「故里山河」の出品作を中心に展示いたします。

この個展は、郷土の風土を見つて描いたもので、伊那谷の景観を下地にした六曲一双の屏風作品を中心に、重厚な風景画で彩られました。

これらの風景画は実際の景観を丹念に描いたものではなく、自らが住む風土に潜むものを描いた現代の山水画と呼べる作品でした。仲村進が抱く郷里の風景への思いは、単なる自然礼賛ではありません、それは土地に根づいた魂までも見つめた目でした。

第二室は、初期の新制作協会展からはじまり、日展出品作、山種美術館賞展大賞作品、グループ展での研究作などを展示し、仲村進の生涯を追えるように構成しています。

身近な景観、人間の営みへの視線から始まり、開拓地での牛馬との交感、農民と大地、そして現代が忘れつつある大地への心などへと、仲村進の芸術の目は展開していきました。ここでは、その重厚に深まっていく芸術観をじっくりとご覧いただければと思います。農業に従事しながら、芸術にも妥協することのなかった仲村進であったからこそ描けた大地と農民、牛馬の姿が様々なことを語りかけてきます。

最後の部屋は、晩年に展開された牛・哀歌の部屋です。ここでは、平成十一年の個展「大地・牛哀歌」の出品作を中心に展示いたします。

この個展では、仲村進の作品に住み続けた牛が、大きく形態を崩し、空間の中でねじ曲げられていきます。また赤と黒で大胆に構成された画面は、重く沈むようでもあり、情熱が奥底から湧いてくるようでもあります。それは、長年テーマとしてきた大地や自然、農民の世界から離れた、生命の根源へと向かう態度があるように思えます。

晩年に至って、それまで仲村進の作品を見続けた来た者を驚かせた、力感あふれる作品が会場に充満します。そして牛たちは、さらに密度を高めて空間に解き放たれ、永遠の場へと旅立っていきます。

仲村進は、伊那谷に生き続けた作家です。その芸術観は伊那谷の風土なくしては生まれませんでした。この地の芸術がそこにはあります。

▶牛・哀歌　平成十年 本館蔵

調査ノート
飯田市・開善寺の摩利支天（まりしてん）坐像

摩利支天とは、サンスクリット語マリーチーの音訳で、日月を指し、陽炎（かげろう）を神格化したとされる古代インドの神です。自らの姿を消して災難を除き利益を与えるといわれ、日本では武士の守護神として、江戸時代には大黒天、弁才天とともに蓄財福徳の神として商工業者の間で信仰されてきました。

飯田市上川路の開善寺は、渡来僧の清拙正澄（せいせつしょうちょう）（一二七四－一三三九）を開山とする臨済宗の名刹（めいさつ）です。この渡来僧は摩利支天（まりしてん）の像を袈裟にくるんで中国から海を渡ってきたと伝えられ、清拙にゆかりのある寺には必ず鎮守として摩利支天の像が祀られています。そして開善寺でもこれまでほとんど存在が忘れられていた摩利支天の像が現存することがこのたび改めて確認されました。

本像は、三面六臂の木造で七頭のイノシシの台座上に坐し、像の表面に彩色と金泥を施しています。三面のうち右面はイノシシの顔になっています。像高約十三センチで台座と光背を含んでも二十六センチ程の小像です。経典にはこの像を造る際にはできるだけ小さくするよう決められており、現存する摩利支天像は一尺に満たない小像である場合が多いようです。

ほとんど人目に触れることなく厨子に入っていたためか保存状態は良好で、丁寧な彫技で好もしい像です。清拙の摩利支天信仰などを考慮すれば開善寺が建仁寺の末寺であった十四－十六世紀頃に制作されたものと思われます。

同じ飯田市内の白山社里宮にも摩利支天のお像があり、類例の少ないこうした仏像が近隣に二体も現存するのは貴重なことです。（織田）

▶摩利支天坐像　飯田市・開善寺蔵

資料紹介
辻前遺跡出土の把手付鉢

常日頃公開されていない上郷考古博物館所蔵遺物を中心に、関係各所から集めた資料を展示する夏休み特別陳列は今年度で四回目になります。昨年夏には「考古学からみた飯田下伊那の渡来系文化」を企画展示し、馬匹（ばひつ）文化等々を見て頂きました。

この集成した遺物の中に、朝鮮半島の技法を真似た土師器（はじき）の「把手付鉢（とって）」が三点ありました。これは飯田市川路三区の辻前遺跡の遺構外から平成十一年に出土したもので、長野県下で初めての発見です。この土器は三点とも古墳時代後期初頭に比定され、平底の浅めの深鉢でほぼ同一形態です。器高一〇～一二㌢、口径一三～一四㌢、底径六㌢を測り、厚さ二㌢、長さ三～四㌢の先端部丸味のある把手が一つ付きます。内一点は内面黒色研磨の内黒（うちぐろ）土師器です。

この種の把手付土師器は古墳時代の甑（こしき）に多くの類例があります。しかし、今回紹介した把手付鉢は把手が一個だけと言うところに意味があります。今でこそ把手付カップは一般的ですが、古墳時代中期以前には日本にはなかったのです。大陸や朝鮮半島から渡来人が日本にもたらした新しい文物資料の一つで、渡来人のあるいは渡来系文化の痕跡遺物として、九州を中心に発見されています。比較的古いものは丸味を帯びて棒状に突きだし、新しいものは角形把手となります。

最近、当地方の古墳時代資料に、渡来系の遺構遺物が比較的多く発見され議論百出しています。死生観に伴う風習や技術を伴う内容の事項は、渡来人本人や間接的な存在を示唆しますが、朝鮮半島系の品物が単品で発見されても、必ずしも渡来人の存在を意味しないことに注意しながら資料収集をしています。（岡田）

調査ノート 阿南町富草層群産の中型シカ化石

昨年八月、化石採集の行事で毎年訪れている阿南町浅野の崖の含貝化石砂岩層から、シカ類の足首の骨（舟状立方骨、写真左）を発掘しました。おりしも当館でシカ化石の特別陳列を開催中のことでした。

これまでに富草層群（約一八〇〇万年前）からは、小型（柴犬位の大きさ）のシカのみが知られていました。このような小型のシカは、角を持たず上あごの犬歯が長い、現生のマメジカ科やジャコウジカ科のような形をしていたと考えられます。

一方、今回発見されたシカは、現在伊那谷に生息するニホンジカ（中型）位の大きさです。

今回の化石と同年代の欧州などから知られている中型のシカには、現生のキリンのような角を目の上もつプロケルブルス（シカ科）や、目の上と後頭部に合計四本の角をもつパレオメリックス科のシカがいました。

日本国内で同年代の中型のシカは、岐阜県の瑞浪層群から、下顎片や上顎歯・前肢・脛骨などが「ミノシカ」という名前で報告されています。

今回阿南町から産出した足根骨の大きさは、「ミノシカ」と一致します。

今後阿南町からも、頭や下顎など、欧州など大陸から知られている種類と比較して、このシカの種類を特定できる骨格の産出が期待されます。（小泉）

左…阿南町産“ミノシカ”化石、右…下伊那産（現生）ニホンジカの舟状立方骨。
前方から見たところ。

インフォメーション

1・2・3月

美術博物館（0265-22-8118）

◆展覧会◆

・仲村進展－大地と語り牛に歌う－ 1／14(土)～2／19(日)

・作品と出会う6 2／24(金)～3／26(日)

・第6回現代の創造展 2／28(火)～3／21(火)

◆プラネタリウム◆

・子ぎつねの白い手ぶくろ ～3／5(日)

・アラジンの大冒険 3／11(土)～6／4(日)

◆追手町小学校化石標本室公開日◆ 3／19(日)

◆美博研究活動報告会◆

美博の学芸員・専門研究員らによる美術・人文・自然分野の研究活動の報告会です 2／**18(土)**

◆講演会（トークショー）◆

「仲村進を語る」 2／5(日)

トーク…成田環氏・仲村良一氏

◆美博特別講座◆

「日本的表現への探究」 2／11(土)

講師…井上正館長

＊延期になった第三講の振り替え

◆美博文化講座◆

「昭和初期の映像と三遠信の民俗」 2／12(日)

「旧飯田藩士柳田家日記『心覚』を読む2」 3／11(土)

◆自然講座◆

「冬でも虫は動いている!?」 1／19(木)

「ヒマラヤからみた日本アルプスⅦ」 1／26(木)

「哺乳類の生活を追って」 2／9(木)

「ウラン鉱床のナチュラルアナログ研究」 2／16(木)

「伊那谷自然史発表会」 3／26(日)

◆プラネタリウム関連◆

・プラネタリウムかるた会 1／21(土)

・星空観察会 2／25(土)

・宇宙をのぞこう 2／25(土)

◆子ども科学工作教室（要申込）◆

・FMラジオを作ろう 1／28(土)

◆寄贈御礼◆

・太陽鉱山産鉄マンガン重石 ほか3点 久保田康弘氏

ありがとうございました。

◆臨時休館◆

1／11(水)～13(金)・2／26(日)

考古博物館（0265-53-3755）

◆講演会・講座◆

・勾玉作り教室 1／21(土)